

「生きることはキリスト」

詩篇
ピリピ人への手紙

第91篇14節～16節
第1章21節～26節

説教 岡村 恒牧師

「わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。」(21節)キリストの使徒パウロは、自分の生と死とを並べて大胆に語ります。パウロは他の手紙でも、「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」(ガラテヤ人への手紙 2章20節)と告白します。

かつてキリスト教徒を迫害し〈サウロ〉と呼ばれた者は、キリストと共に十字架につけられて滅ぼされた。今私は、キリストに結びつけられた者としてここに生きています。そう語るパウロは、《わたし》という言葉で連呼して、大胆に自分自身の思いを口にします。自分の思いと神の御業(みわざ)の間で《板ばさみ》になりながらも、神のみ心が成就するようにと祈るのです。

誰でも、イエス・キリストを救い主と信じて洗礼を受けた者は、パウロと同じ板ばさみを経験します。自分にとって最も良い、利益の多い道と、損ばかりでも神の御心に適う道との間に立たされるからです。世を去ってキリストの元に行く方がはるかに望ましい、と多くのキリスト者が叫びながら、それでもなお、神のみ心であるならと地上に踏みとどまり、さらに豊かな恵みを受けて歩んで来ました。

地中海世界では当時、生きていくことは肉体という牢獄に魂が閉じ込められていることだと言われ、死はこの牢獄からの開放だと考えられました。しかし聖書は、すべての人には死ぬことと、死んだ後にさばきを受けることが定められている、と語ります。(ヘブル人への手紙 9章27節)死んで解放されるのではなく、神の前でさばかれる時が来ます。人は誰もがこのさばきを知っているのだから、何とかしてこの問題を解決したいと願い、様々な宗教や哲学、思想に助けを求めて来ました。パウロは熱心なユダヤ教徒として、律法に精通し、神の掟を必死で守って生きた人物です。キリスト教徒を迫害し、根絶やしにしようとしたのも、ただひたすら律法に忠実に生きて、神のさばきに耐えるためでした。ところが、復活された主イエスがこのパウロに出会って下さり、神に赦されて命を得る道をお示し下さったのです。パウロは、ただ神のひとり子、主イエスの命を代償として神に赦され、永遠の命が与えられることを聞いて信じました。180度方向転換をして、神のみ心に従って歩むようになりました。

私たちは、パウロのような迫害を受けていませんが、日常の生活のいたる所で、信仰の板ばさみを経験します。私たちが心に浮かべる思い、口から発する言葉、手が成す業が、繰り返し神のみ心に反し、自分の歩みが神から離れ去るような歩みであることを思い知ります。この地上で愚かな旅を続けるよりも、むしろ、神のみ元に召されて、本当の平安に移される方がはるかに望ましいと思われるのです。しかしパウロは、自分の願いではなくて、神のみ心が成るようにと祈りました。十字架に架けられる前夜、主イエスが祈って下さった祈りを思い起こします。「わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい。」(マタイによる福音書 26章39節以下、他)苦しみとあざけり、絶望までも味わうことを、神のみこころとして受け止めて下さいました。

今から100年ほど前、アメリカのある教会で、長年教会学校の教師としてこどもたちに主イエスを宣べ伝えた一人の母親を記念して、礼拝参加者全員に花が渡されました。あの母が、私のために祈り、生涯を通してこの私の救いのために労してくれた。そういう思いが、すべての母なる者への感謝と、神への讃美を表わす日として全世界で大切にされています。神は、母たち、信仰者たちの祈りに応えて、それぞれに信仰の旅路を与え、やがて世の終わりに受ける神の祝福を確信させ、神に感謝をささげて過ごす日々、神のみこころが成就することを祈り求める日々をお与えになったのです。

この地上で、私たちの肉体をもって神のみ心が実現していく。これは本当に恵みに満ちた喜ばしい出来事です。その歩みの中で私たちは、神ご自身が、御子イエス・キリストというかけがえのない犠牲を払う決断をして下さるほど私たちに深く愛して下さいました。

この神の愛を知る時、私たちの希望、私たちの命の根拠が、ただ神のみ心にあることがはっきりしてきます。私たちは、自分自身の本当の願いを口に、神に願い求めながら、それでもなお、神のみ心だけ成就するようにと祈りながら歩むことができるのです。そして、私たちの信仰が前進し、信仰の喜びが与えられる一日一日が与えられていくのです。ただ神のみ心が成りますように。

(記 岡村 恒)